源氏目案 下 わかの巻

源氏用意巻第六

あ

一あつしくめるむるに心や　靈運　當運　日本紀

一あるに　猶ならせ

一あるれるる　あるれるるや

なるるるるるるるに云心や　あるるれと云心や　あるるるべきや

一あるるる　無慶　無益

一あるるる　無為　無情

一あるる　無敵

一あるる　無用

一あるる　無益

一あるる　無力

のるるか義い源氏のるるに心るるるるる心るるるるや

一あるるるるる　眷雪若短日高起　後世君主不早朝

長恨哥

一あるれる　禁中　朝餉の間

そて二ちあり。ぬ面して。ぬ腊と。朔ゝ也。早朝。まいる也。常の供
ぬゝ氏あゝず神借也。著といふにもゝゝくゝづわてあるゝゝ
つゝ也。わゝく著をわて。高ゝとゝ。切ゝいゝゝ。ねこゝゝ
一あゝゝゝゝ　仇敵
こゝゝうゝどゝれゝゝゝゝゝ也
ゝゝゝゝゝ

一あてもう　あてやうう〜さ心や
一あそん　紀氏や　紀寺とあげて　源のいひのみや
一あてべ　貴人や
一あこ　倍子　紙子　小太と云女
とを　ものまうてあこと云や
一あうつけ　あつ〜もつさ人
の心あうれと云や　代々〜いはふひとひれてつる物やひくうく
つけ〜ものと云ぐ〜　学る多
一あやうく　あいうくや
一あさうう　あうさうもうさや
一あぐうう　阿闍梨　安恵　内侍　拳慈　寛大師　寺　天台座主　才
五　始補　阿闍梨
一あうて　もぐうう心や　孟津　馴
一所　あさ嵐の　源氏のいそぎ　むかふ　風　風　心　もうしあと
ち人のもうしれちすや
一あかい　東内や

一あかうまうて〜地〜　ものうて人をいさむかふ海や
一あ〜れ嵐ものうあ　朝露　貪名利　夕陽　愛る源
白氏文集
一あつう　諸院　別当　あづ
一あいぶれう　あい〜さや
一あ〜ものう　そをのゆむ
一あうれあ〜うも　もげさす
一あさむ〜れ　歌　ごまれや
一あかう〜　究賢　あかる
一あうてまうう　阿伽　焼語
一あさう山　人の讃　波波伽と
さいへいのえんまいへけうとうせうか

所ハ心ヲ遠ざかるゝ所也

一あ　ゆ　ゆ　ゆ

一あるひとすうこれうとだ花 九車ハ唐庇檳榔
庇毛車ハいられ檳榔とも云て呂眉半蔀 御代おうは
皆あづろをとられて今ハ見ものあづろハいづれと定ぐ
居貫ハ白紙束濃の下すだれとく あづろれ車ハ下すだれ
とかけとこ人べど女房の常用するハ八葉の車ゝも下す
ぶれとうるうるゆれバいづれとも御遠ゆるべ すう
ゆれうハあるべうせ

一扇のつまゝ代ゆて 強扇のこと
とかうゝうゝや

一あさうゝや さる人ゝう田ゝハ泥
中れあるゝ紀ゝゆうゝう物也 外もゝ物つゝハ山田のゝうげ也
めゝ心ゝゝあるゝ

一夜ごゝゝるゝゝゝゝゝゝゝ
文選 平山之女朝為行雲暮為行雨

一あゝ紙むゝまゝゝゝゝゝゝゝゝ 中家へ引物也 寶亀六年正月七日天
皇御揚物院安殿設宴於五位以上既而内既宴進青物
馬略之河海に委

一あゝ紙ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ときに童女の上はかまの袖や水干のやうなる袖や赤袋乃
うへざまに袴ぐくるものぐくるとも紐袋ぐくるとも袖やあこめは二もかさ
なるなる袖や裳ぐくるとも袴ぐくるとも面うちに紫裏萠黄を云や

一あまびつ　ちこのまや三歳まで用て法師の門をたち
おろすとや　天皇

一あまびし　史

一あまくだり　紀氣

一あまくだりて　殿上人のうへのくらうらうぶくらうぶ云

何のいとゝ思ふるうへのくらう　一あまくだり　紀氣

一あまくだりて　殿上人の結

六位のは緑の袍あまくだりて殿上人殿ばらして文元服なれて
殿上人をする心なり地下へ立入る儀なり一世源氏なは
直廬侍従伝下なれはあけの袍なるべし　光雪抄

一あまのかけはしは　学生の入学の時文章院の堂監の書ぶ
き名簿にあまのかけと書也聖廟は字は黄三三呂清行条
は　あまのはしたて　源なるべし

一あまの天人也　舞妓と云

丑日は赤色唐衣寅日は青色唐衣辰日は青摺唐衣赤紐日
蔭髪ホや青摺は小忌のゆや源氏の志文やとも給も辰日
のゆなれは青摺ものうて　お節志色〳〵書るや青ぞらの紙は
　一あをいろはちくさ
　　青ぞらの唐紙
　　青ぞらの紙
　　青摺ものうて

一あれはいろはちくさ
　　青ぞらの唐紙
　　青摺ものうて
　　青摺ものうて
　　青摺ものうて

一あしらびとづくり　脛ヨハ文字ヨ拾ハレしまを　むびの
月のようをへていくり　一あさ茂田のふれとりれ
海賊ハ大波ようり見をうりうるや　あさ茂田ちれば白やうるれ
や　うさふれちハ紅のふれるや
一あるうりうるり　奥の字や　ばくハあるるやのるハ色
るや　昔やうれるれや　一あるべといふより　を
ある人ものるハあるべあるるべ紙ものるべるるもるべれ
ハ　青ようるべるべ　悪しして　数言の哥ようあるべと云ハ
好　訳由れ　やもの　ハ中れ　文字ものるべ　古今五紙と云べるそ
一あれをれるれ　ハれれ　ハれれば　きしあべの後撰五一文てるれハるれであべ
一あれいるのるべるるる　るれの皮あれ　李ノ王記踏寄

人　袍束　緒冠　麹塵　用服　袍白下　襲着深沓　持白杖　西宮
襲束ハ云　青色　麹塵　袍白下　襲半臂　白石帯　深履　綿
花白杖　今案此青袍とハ　哥ハるハ下ことべをれをるる
襲　沓と　袍持ハ二人ハ　袍を　着するハこれるる　白杖を　弟
人まで　を　持や　弟童ハ　絲　靴をるべこれ
一あべ　胡麻と　日本記ようあるるとるるあ　糸人の屋勝ち
るる　祈れ　今も　鄙舎ものべに　胡麻をる月
一あるハ心べ　心るるるや　一あれべ　あんのべべや
一あるれすべこのも　樗ハ面　落食　裏青や　すべこハすべを
紫る　緑るるを云べ　一あハべるるる　愛逆　世俗
一あるんやるれあれ　紫をべ
あハるるれといるる月

落胤腹や

のさうや

一あやもうし　歩行や

古　さうぶうちひうぐうこうひ

ひ弄こそ心うべ〜　舷者の衣にて内大臣殿すあうこも

一あさ日さす　矢さと弱日さや　安仕こ来給や　我を忘給ちこや

一あさ弱れと　ひうるうべこそ　急を乱こうせうや

一あ紙こびのこうめさ　弄同こうれこうめさこうや　清こは

出こうも織元向こうめのこうめさはいうやうるは見べこうれ　新

風流の時用ふ指貫や　合恋一種や

一あすれはあこび　裳是これ指こうべこうるこ

一あうこうこうこ　あまつこ

弄こみ

一あうねさる　日は異名や

一あこうこ風　あうこうこうぐうこうこ

一おうこうれこうこうこうて　袋こうもこん

一あさ日さる　矢さと弱日さや　安仕こ来給や　我を忘給ちこや

一あさ弱れと　ひうるうべこそ　急を乱こうせうや

一あ紙こびのこうめさ　弄同こうれこうめさこうや　清こは

出こうも織元向こうめのこうめさはいうやうるは見べこうれ　新

風流の時用ふ指貫や　合恋一種や

一あすれはあこび　裳是これ指こうべこうるこ

一あうこうこうこ　あまつこ

弄こみ

一あうねさる　日は異名や

一あこうこ風　あうこうこうぐうこうこ

一おうこうれこうこうこうて　袋こうもこん

一あうこうこ　あうこうこ　あうこうこ

弄こみ

一あうねさる　日は異名や

一あこうこ風　あうこうこうぐうこうこ

一おうこうれこうこうこうて　袋こうもこん

一つれと　あくあるくるまと　秘曲ことのるや

一あくるれ車れひ〜ばて　昔れ世びあるされ手　法ケのす

一あくさめふさて　老者のこ面ぬぐ〜

一あこうう〜　一あくこ〜るるあて　浄土そや

一あ〜れれあれのこう　あれといるれや車のるや

一あづまあそびの　神系の名や　和琴を用や

一あ紙そびの切をて切て　折紙の面に張こるや居ぎれぐや

一あそびのこざうて　花文位装束や　寄被のるや　寄磯辺

八葉硯の名や　そこ文よ作こる拍や　素〜　襖これ

一あこあこ〜うす〜　袋れ文のるをつくら

一あくこ〜る物のこざ　花あをこいうりぐや　寄丹八流寄る美や

きこ〜こるや　こる

一あこさこ〜こるぐこ　苔のこ〜こ　一あこ〜こる世　上代のるや

一あこれさゆやこれ　世皆不寧国　如水漆泡煙　法花経

一あこさこるこさひ〜こ紀のこ〜これて　あこるこ〜

一あさ家のこれ家祖　命れこるをつくら

一あ〜のけのけゆる　共文のあ〜こるや

一あこと紀馬ようけ〜　陵馬　移の鞠い位方れ糸馬ようくや

一あるれ系　仏よ時花とて　ぬ〜こるの花をなるや

一あるんぐひこ　大論云　親迎仏入涅盤之後　阿難登高座結

集法經之時其形如仏　仏衆會疑仏弟子給阿難　登四位之人

や仏阿羅漢ホ不用之其時阿難自然現場

一竹川あくれてゝ　眼赤いるゝ人は命をとるゝ分そゝるゝいせをゝゝずとや

一あゝたゝて　八家世代うゝさに宿をとゝゝ人ゝ真実心のゝゝむ名ん

よいあゝねざゝや

念仏ゝや

一秋の末つゝ　四季ゝゝ七日ゝゝのゝ

一ゝ明の月　十四日ゝゝ後いゝ明ゝ

へゝ　匡房續日本記ゝ十四日ゝゝ後ハ晨月と号す

一あゝさゝゝで　扇ゝゝ人ゝゝゝゝあゝ名ゝ書て　ゝゝ紙

ゝ方や　月隠重山ゝ号　擊扇諭之　朗詠

一あさゝゝけ　ゝゝゝゝ

一 あくれもの　ものくるはかれるものとうひとさんとかるべくぐぞ
ものぬめとうめる
一 あぐべけく　悪者　あぐあるとぞ心なると
一 秋けくの　山井ゆく過の夢うてそあくあ　此宮の夢うても
あるまじきとくいつ代宮ようるとくいち
一 あま衣　まくしぬ　かくれの袖や　あま衣うはるかうやうけて
思ひんとくいち
一 あいたうう　愛敬也
一 あくれ山　悪者　夜也

さ

一 さうくく　曹司　房也
一 さくく　賢　うくくる也
一 さうくく　さびくくる也　河　寒寞
一 さくめさ　耳言　万　さくくる也
一 さハ　やうる也　さうるれ心
一 さうくく　うくめるのよみ也
一 さうくく　さくくる也
一 さぐるて　恋也
一 さうくく　さくくる也
一 さうくくひるまぐてみて　侍　さくの
一 さくくをあぐめさ　深のれ心よい
一 さうくく　賢　うくくる也
一 さくくる　袖　ぬくけるれ　寄　いる　郭　うくる也　それさくくあくるその心也
一 さくあめさ　さくあめぬくるぐれ　神也

一さて　さうでや

一さうじて　なんのうや　四

一さうれと　第や・常乃十三

一ざれそと　ざれうやだといふ心ろ

一ざうじう　雑変ホ　ざうくのうや

一さくうれ　蜘蛛　ひうまいひうと云弟ばうちへてうあり

一三史五経　三史い・史記　漢書　後漢書　文選い　毛詩　礼記　尼

傳　尚書　周易

一さうまうて　さあうまうにや

一文月のさち　文月首天皇菖蒲のうづ　武徳殿

行幸ま・内弁　節会の如し・宴内首　菖蒲　内侍

女蔵人　続命縷を　群臣　ちうあり　一献終て　六衛騎射乃

うあり

一さうしうて　打ちうて　内しうと　ちうと

一さうじて　げうと　内しうと　ちうと

一さうじうちうと　紙や・細うと　許

一さうじうと　ううじうと　ううじうと

一さうじて　遠ざけとや

一さうげうさうざう　人のこうめ

ゆやうのうざうや

一さうじうじて　髪のうちうう　指や

一さうじうけい　いそうちうと　陪や

一さうじうう　ううとうやうれど　そううと

一さうじうき　人で　いうれ　仏・紀の寺や

一さうじうう　紀もとうも　指うじて　中車乃

さいはのい　第一用心や　変化の物こそそれさもん為やそれど
ろうそのびあるさるれば　をそをを治ろぬや
一それろやをを　そやれそをぞれろの歌や
一さく　花る　うつてふとは　うつとふ名や　てふ　ちとふ　初や
一さつろいろろい　形　童女や　一位　さめをろ　ろるれば　源氏
のりつれられろ　童　どうじ　とろべ
一さるべきれつてすせ　生る　封や　すせ　ハ　のをを
ふなする
一さいの寺ちばちのむすめ
前播磨守護や　ちばちの　新穀や　初穀　心の　穀や　明石入道や
一さつろは　去ぬや　近ぬや　万葉　をそひのさろはとあるを
一さいつ人ど　さつ人ど　一さいるるろ　河原

一さ　ぐ　ぐ　ぐ

一さゝがひ　競　荘子やきゝばしやゝ

一左近令畑ひごのうわへ　臭のあるさ人ゆべ

一さゝもばゝうず　花びら一枝の付る枝あり　表裏ぐるり未

つむとそゝるとめづらしくゝもの上もや

一さわや　それでゝそゝとゝ付ちて

一宰相のうち　参議　出家行事　延喜十六年　弟子院　法皇

女十出家　未行受　保忠　其時参侍　出家

一さんざーまゝて　参座　幸　出の所ゝ　元見

一さんのうち　弄　弘徽殿南ゝとゝ　御　出家

一さゝれうゝ　ゝ付ちて

今案ずに　畑　二面ゝ　心れうゝ

きはゝれをいかゝも　設いうゝ　ゝ一をゝ

畑やゝうゝ　ゝ畑の二ゝ　ゝ畑のごゝ　庭裏　茅

ゝわうゝれゝ下ゝれうゝ　人のゝ　庭　倉の詩を用ゝ　物

のゝれゝ　西白ゝれゝ　蘇芽れうゝ

一法家　ゝ　法家ゝ　ゝ去ゝ　ゝ

紙ゝ　ゝ入ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

弄　法家ゝれ代ゝ一ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

法家のゝ定ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

内裏三月　依神宮　詔　宣奉祝　伊勢国　十鈴河　二皇女

係姫　令着　祭給是　法家始也　河海

一法院　清涼　天皇　弘仁元年　置法院　号　皇女　有知内親王

母交野
女二 為秋王 神皇式云 天皇即位定賀茂大神 秋王 仍
簡内親王嫁者 ト定

一秋家朕左衛門のつかさ　左衛門のつかさ 伊勝朕つかさ
さゝめられて後門裏の役屋のもとりて 初て秋家つかせ
らるゝ事へいつも給ふとゝや 是は左衛門尉 入れ後よりそ云り
数隆 伝云 伊勝へ〻〻せ給ふんとて 三条齋之間ト定す
家有ると 大内裏朕 後日へいせ給ふゝや 給大内つかさ
左為 寄ゐ 近衛 弦限 左衛門尉 あると 内裏 ゐ一町の
ゐて 近衛ゐ 弦限 ゐ東廂屋ゐて 母ゐ〻ると 今絶
ゐゐ 或説云 左為のつかさ朕 左為尉 云 孟津
一〻〻〻 四ゐ 地 入家也　一〻〻ゐつかさ 地文也

一三条宰相の 三条中将 随行 十九条間 任 転 遠 在昌賦 蘇武也
十一月中長至夜 三条宰相 遠行人 若為 独宿 楊梅館 冷花草
庶一 病身 文集　一 歌迦 半尼仏 弟子 弄 金剛仏
子葉ゐ〻〻云〻〻の心也　一さゝひとゐて 左為云 公卿
北主 今不越境　一〻〻 幾瑞ゐ 奇怪ゐ 左為
一さゝれ四つ入て女ゐ家 或説 滅皇女 愛子 内親王 弄 女
家のゐ ゐて おゐ〻〻 苦朕ゐ 概給也
一さけゐゐつ〻 殺の字也 悲殺ゐ〻 給ゐ 作ゐ 入と
うゐへゐゐつ心也　一さやゐゐ給〻 義朕ち
源氏の放院 朕 放ゐ給ゐ〻 給ゐ
一さゐ朕ゐ〻〻て 為 風也 地ゐ〻ひとゐ〻て云朕

一さいぐのはし　さすらいや　法文の額よさしめべきかな

一在原中将の名をば　夜つゆの勝

さいぐさいくら

ときさめ法師　在原業平ハ　ものごんのすけ　在原と云也

一さくらはなるを　常は衣の裏ろさ　稜芳ありと　梅条と云也

一法院ハ　ものづくて　法皇ハ　一代一度　法院ハ　ものみ　ハ　ものあれど

一さいぐくりて　ものに　ものくて

一面くはのうぐれさ　童ハ　汗衫　ものれど　ものに

ものて　袖ぐりさくりまや　一さくりかうぐまくく　猿ものさく

弓と云也　猿木起ハ　聖徳太子　秦川勝　仰て　作二十六番面

人くる　間裏紫宸殿　ものて　薬をくる　平時太子　以其神

永字　神ものとくて　名ものて　申楽とつふとくる

一さい人　ものや　一座のものとくく　案試の

日い長幼　ものて　ものて　人の種性いくめや　故に冠者の

えいも　ものに　ものくて　ものくくく

紅梅や

うちうれてこそうくてうち　一きみうれのこのごろ　げ牙の

そこいわまゑこと書心八月九おとこをとるまゝにうて女八こ心　一おまゑ　唐の書よりぬれ丈峰

そひくべしといつち　一さくべさまうちきみぐれ

たまと書云卿のもや　呼法花や

一さくの集雀院　義平ぬれ門世ぬ常い字多帝を并集雀

院とりや　今集雀おりまゆんよ前のなと入うや

一さいつくん　云くさんくも　一さぐれこうどの古万葉集

ぬ古万葉のもの法物さぐるゝ　是集古万葉集うて別る四

巻る九　うちうくさ云をこ伊ゆよ古万葉序あゝこち何云

れい世中にちやうくとちるれい祇代ちゝけ時のみどくん

人の年紙くきあつて　万葉集とるづけて　ぬくれよつそ　ぬれば

ちる紙ゆくいみちれあくこしこそひて　こみべくんくちぐ踏

滝瀬ぬれ門のれ撰九　一さううれ歌上人　唱年ぬ歌上人や

さうぐちや唱年や　一さいわれ上　秋好家ゝくぐち

のひしぬ　そちるあれくくひぬれ　一年　ぬくれうしのくこるどゝしるや

一つぐぬ　秋好中宮より女三を次ゝどいんりさいつぐ榊の縁や

一さくれのれ堂ゝて葉師仏　見松風巻　源氏の建立栖蔵ちるれ

すゝ九　葉師八寿命をいのうゆんるし

一さいさうりうちやう　寂勝王経　金剛般若寿命経河

一さくぐ世ゆうゝ　四十賀い浪短命の例多　若鳥　延宣ム

八月就十七年　四十賀しゆて　ぬ千七ゝて　薨ゝ　貞信ム　延喜十

九年四十、変わりて七十歳にて薨じ給う例もあれど多分は
つきそめしすくなきさとしけるやとぞ
一さいしの所の岸に　沙婆和尚　菩提大師僧正　拙云到洛陽安養寺
還来機出度人天心元
ちめのさちうといち
一さいすゝ　さいるゝ　ぬべし
一さるまわうち　六時の念仏
あいあるもの　神社のあるべし　あるべしのうつ　ようべの
とちうぐし　名いあるとすれば　中ねの心に　ほとあひ
いとこ心をあさとぬべし
一くちやう　杖
一三条殿と東ごとに十四日つ　うつられ機のうへと云考に花のお
ちぶ京の智い殿いとうりうこそ十四日にておりつとこそ
一さそうれつまにすあり　歌と麻呂茶といつや
一うぶべさそうやおりけん　官位ますこめくさ　ぬるとや
一宰相の中将　中納言　ぬ　結び
のれ　極　しその辛れ秋と心ぬべし
辛れるる　菖蒲　歳の秋と心ぬべし
一さぐりれいさぐべき　今始　ぬるるもあるぞ　志ぬまくく
ぬるんし　始りん　物　心のそそれるや
一さそうそ　そそるる　行いるくそどちるれしゆへ
あるべきの心や
一さぐ　倍　さぐすや
一さちも　さちあのて　泣　晩
一され院　源氏　暁　紙　おそ

まして後うをゆくるうしや 淵瀬 天皇大宮寺まれ道せう
ひしてうけると
一ちうしの別角 毎上人と云
別角いたゝ家大丈うべし 大家うと丈夫や 禁中ハ毎上乃
別角たゝ大片ちゝぬべし 家ををうるうや
一ちうくし 乃の魚ハ毎くてちゝわて矢道ハ懐中して
退出や それとう魚と云元 一さゝうるあうつるさいくと
ちうう 釈 一ちう地のつるる 白狂のうく凱
せばうくしゆうう 一さうしく 雑事くゆ房
元ゆ出てうくゆ 一ちう毎くてけるも 寝殿と作改
うと 一星びうう 上蔵しうゆ
一 ちうしうう 四阿 四方へ菅出しうう氣と云ちうハ戸

とうてくしく 出をきうせうるる氏ちうのうち
一ぎれうるゆ おゆ元うびうゆ
一 星元名と 星の名いうさといゆ氏我分うれしいうちうさと
一ちれううう ひしやう ゆ狩 山寺彩拾遠報中ニ八紫式アとゆり
一さうびうう 星ゆれうう心元 寺家一光遠入吹放師 詳平引
積休河
一さいうん ちうびうんの心 一ちう陽うう 狩ゆ
一さうやく 雑役や 若菜 紙角のハ湯や 若菜ハ澄や 一ちうれ 不去別
一ざけ 邪気や
一ちうびやうし 筋物やや 一ちうじおうて 結下や
一ちうう 残宴や
一さうとう けるぞの心 一ちうぢうう ちれうや

き

一きりつぼ　きはよはあるぬが　ちちにつきそれほどれ分際そてちきと
せ　きけまきちうきけあるめせ

一きしき　儀式せ　一きうしある　清せ

一写　書法　勅る此物紙よ　何ても云ちうと　きちと
きちめちきと　又写ちうちうせ　ちもいよ　ちるちうべし

一きりつぼ　御系舎と　桐壺じ云せ　よ舎の一せ　弘徽殿　承殿
宣耀殿　ちど紙色て　行馬道　できちれで　おちちれる
ちちうせ　よ舎ちいよ　桐壺と　淑景舎　梨壺と　昭陽舎　飛
壺　ハ　藤壺　梅壺と　凝華舎　雷鳴壺と　襲芳舎　ちいよせ
いづれも　内ちう　相ちうちう　有相つぼと云せ　源氏の　御息

所の　住ちる　所せ

一きさいの宮　后宮せ

一きちう　響せ　借よ　振舞と

一きびと　雅　日本記　おちる云せ

一ちちうみく　ちうせ

一ちちうと　表面のちせちう

三位ちて法師の三周法と　比ちう　一吉祥天女　佛の春屋ちれ

仏法　めちうちうせ

一きあの者ちひ　友ちひと

ちちのハ　衣ちちぢ風ちちう　ちちあるとちあるべし

一きちうきいと　男ちちうちうと　人ちれば　ちる人ちちうの

たちれちちぢちちせ　一きちうけぢ地　板ちちぢ

相ちちちて　ちち紙ちちちちちちれせ

一きちれ　ちちて　ちちうちちと云ちちうと　名付　水流に

一きりぶね　隣家へいひそめる紙や　ゆやーさ女の名也

一小山寺　向南山　寺　音ハ四十九院寺也

一きーきくそん　低式官　政宮也　ひちもちいひちせいう

うりそうや　寺　大内記　仲ちう

一きやう　あいのうーけうけのうーけのうこ　故学生のこやのこ

たうぐや　殘墓　唐更　搔上蔦　搔髪のそ足　つるまれや

一きさいうとぐ　聖句　童句　翁句の数や　投壺ハ来ひ豆伝ず伝

ぐねまておくーまぜぐ　伝句とのあふ　ぐーー

一きーをかりて左大弁ぎーへ　河　狭頭　麦　後撰　云女ハの

みこ元良のれまのるーる四十賀ーー伝けるー菊の名をぐぎ

ーてこ

一きさいあのふ　中宮のかの陣

一きやうーく　還逐　さらくーる

一きーる　中宮のかの陣

一きーれぶんる　中宮のかの陣

心や　うーーくーありぬぐ心や　ぬるひやるぬるも用ーる

一きんぐちもいるーもーのぞ結　弄右大臣の長延　望官活也

一きーる　中宮のかの方へいーてや

一きーれ　柳の糸　柳ハ非情ーーて　ーる心あり　風

ーる　ーて　気をーる　漢武帝の愛柳　ハ一日ーこ成ーさ

ぬるゆへーる　人柳と名づけーーる　ぬこ眠ーるも云也

一きーーそる　ぐ　ーれ　ぬ　愛をーーて　ぬれ　ぬぐーるーる也

ーーーーーハ　湖の心也

一きーーねのすーーる　鳥鳴　松　推　枝

一きーるむのぐく　ぬーーーーーー

菊づのーる也

し　玄輝門の方也

心や　うーーくーありぬぐ心や　ぬるひやるぬるも用ーる

一きんぐちもいるーもーのぞ結　弄右大臣の長延　望官活也

一きーる　中宮のかの陣

一きーれ　柳の糸　柳ハ非情ーーて　ーる心あり　風

ーる　ーて　気をーる　漢武帝の愛柳　ハ一日ーこ成ーさ

ぬるゆへーる　人柳と名づけーーる　ぬこ眠ーるも云也

一きーーそる　ぐ　ーれ　ぬ　愛をーーて　ぬれ　ぬぐーるーる也

ーーーーーハ　湖の心也

一きーーねのすーーる　鳥鳴　松　推　枝

一きーるむのぐく　ぬーーーーーー

あり。芝は黄なるも

名称　宋女面巨勢金器　玄忠　玄義也

一きんまち　玄義　絵師　在高

一きんひけるうけ　松風の宮ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

の地多くゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

他の種の巻ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

一きいぶけく　きつゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

一きゝ紀の女ゝ日の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

時行幸上皇家　創　天長十一年正月二日　仁明天皇　幸半

雀院　他　他　同　家　謂　太　他　于　柏　原　見　事　ア　主　記

一　玉　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

一　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

肥前国松浦郡鏡神　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

　　　

家又や、お房とハおのゝ。又ハの政所ゝ人ゝ
ゝ。
第三ハ大方源氏の宮家の子孫ハ政所といゝん。何すゝんかゝ
一きやうゝゝゝゝや　琵琶や　軽　鞠のゝや　ゝゝゝゝゝ　猫をゝや
一きんゝごゝゝゝゝゝ　琴ゝよハのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。河海一ゝよハ
撥ゝ二ゝよハ所蓋三ゝよハ水字餅四ゝよハ蓋海波。ゝよハ鳳鳴調
ゝれ是也
一ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

たのもれたるもつけるうー・大和物語よのをかち・碁の上手ありて・碁聖といひて・長谷十三子の月の日・碁聖奉物仏碁式
獻之云

と尼ありて・親も名心をくこさんとうち

一きりうりつぐ　芙蓉也　某記　伊勢物語のこゝつくる人也・
陽和はしめてひかりのうすみどりそれとゆるの浮舟乱のうち
ひしてくれる

一きさんぐね　佐よ一歳人を云也　むこがねもむこの笠量也

ゆ

一ゆきふ　定加と書　りくの名もちゐ心
一ゆげいの令婦　獄負と云也・矢をいるゝ法也

古淳門い引夫　芋ようつくさりてゆげいとゝ
令姫いるれ世よ関侍のは織物をもあ中らうを・首も
令姫と号ちち・佐民已下の女也・義人と云ハ下萬のもれを云
賀茂祭令姫づひ・義人づひてあるもの

一ゆうづく夜　夕の月夜也・夕附夜方

一ゆさくひ　りうう也

一ゆきくしきる　いまくしきる也

苦悪ようつふ行也・ゆうるるをゆきるるをいふ也

一ゆいこん　遊云

一ゆくうー　ゆくしゆくうきる

一ゆうくへ　ゆくくの心也

一ゆうつゆるひをうく　涼のうをあうーゆふを云也・ゆくへ
ゆくくーゆうすき・稲ゆるぐーてくーゆふ吸ぐー

一ゆつ　弓絃や

一ゆくてのれことい　つゞでゝ孫のとうせのうすや

一ゆふつけて　ゆふけてや　晩京の系や

一タまつのうゝ　うゝ　うゝ　うゝ　末つゑ　ゑつゑ

一ゆさうゝ　うゝ　うゝ　うゝ　うゝ　ゑつゑ

一ゆーいろ　紅葉いふうゝ　禁ゑと云て　あゝゑをゆゝ

ーゝゑさいふ　誰もうゝあるや　制禁ーゝゑゝすうゝや

一ゆうひゝるゝ　心ゆうーゝるゝや　安西郎や

一ゆーゝ　結　ゆや　古のゑゝて　なけゑゝや　ゆう心ゆうゝや

一うゝ　弓結　踏斉　後寡弓結や　それを太太ゝゝゝゝ

びてゝゝれゝゝゝや　ゑ　絞ゝ　夜の墨のゝんゝゝゝや　ぶうゝと勝負ゝ

一ゆゝ　復　令栗ノ國忌

一ゆふつけて

いるゝや　づふゝや

郡ノ　祖天日鷲神ノ造ル　綿者　某記

一ゆゝぶすゝ　ゆゝ　綿ゝ　繼ーゝすうゝと云や　旧夏午記ニ云ふ天香

久山之天日羅隱爲手繼　古語拾遺ニ以羅著爲手繼

といゝゝ

一ゆゝ　雷落ゝ

ゝれ山ゝゝゝゝ

帝吟行幸ゑ[illegible]

[illegible]心元

心や

一ゆうよとゝろ　うゝの曼

一ゆざけさ　ひろ〳〵いろ〳〵さ

きい鬢ゞいのれや　ゆうげの弱いゝゆうゞゝ[illegible]の地[illegible]

やゞちゝゝとおゞ

一ゆうよとゝろて　ゆうよとゝろとい紙

ゝゝゝ

一ゆきかうき　汀のかぢか　小荇ハ摘拾ふ　ものなり　八重

わたしまきれゆく　さへまるさとや

一ゆすらの名妙　樱ゆすらや　うゑあしひかみ　ゆかしあしきとや

一ゆきまち　雪の夜

一ゆきもち　動や

め

一めきゝ　行冷眼　さくひさ　すきまづくろう　心ちかそねむ

心ちなべし

一めぬれ　側用　いそんある

てゝう行や

一めづくるる　絞奇　拾仙窟

比叡の神功皇后　松浦　鮎の釣　ようれ　けるをゆうんじて

めづくさら作　けるうるを　ゆうるを　松浦も　ゆいめづくや

一めくらの代　馬道　かひひろ　ひろ　ひろ　

一めしつぎとり　西園寺院

文雅なる中れ位勅行石絶義時云今象親王家又石

絶或つ宣旨親王嫁娶の時石絶の代に絹二方を禄とする由上乃

記とそなる白文のなるもはなはだしく又知足院猟園院

のなれるをして石絶と号をしるをもしるべしやとなれ厩舎人

ちなれ五位六位の法いあるべしやとなれ

一第めしつかさ　瞬めしをと同　一めとられまちうんめをを

目鬼や　めしちとれるうん

み

一みやつかへをけて　礼記寝室の二字を三人拍まわひ

をとをとなり　無礼表もちめる家づかへや

一みつぎのい　れ為や

一れをいうてもれをもの

なれど　法花三番　延暦の代の宣旨七歳以前の毒服の殤と物

忌令にあり延長七年に宣旨を忌とをとをとの宣旨を

をとをとして不審をとを

一家をとをとをとを　家服中に禁中にをを

が家のををむすめい泪をを小屏の若家のるや

一家のうちにめをんるすい　寛平の遺誡秘蓄の人必可召者在

麗中に見えしなををて河海よい家の何なを遺すといをを

為馬　必の字ハめををしてをるまをををの時のるや紙い打きをて

めすをををを男ををを

一みやをを　をやをん家ををのもや

文表のるやれ紙ををめのをいづれををををを家をを

矢みのれやすを家をまいをのみゆへなを

一みつゝゆひ びんつゝや　一みづゝ れ厨子

一みゝちゝゝうちる　えびゝちゝ神や ひんの髪を取ゝちゝもや

一みゝ 操 ちゝずがすゝ心や 考ようゝゝゝゝをいゝ

一みゝてゝゝ地げるゝ　官位のゝゝれるをいゝ

一みゝゝゝ ひゝゝゝや　一みゝゝゝげゝれ れ更衣れ眠ゝ

一みゝゝゝゝ かゝゝゝゝゝつゝ

一みいれのほゝゝゝ 小家いれゝ

織縫所をいゝ

糧をゝや

一みゝれの松 れおの松明や あい

までゝゆゝゝ酒や

一みゝけゝゝゝゝゝゝあゝん

まゝゝゝや

吉野金峯山よりゝ月精進や 牛蒡い當麻の寺所弥勒や

一みゝゝゝ 水菓子や

一みつゝゝゝて 幸ゝゝぬれど

勝ゝまゝ背ゝゝまゝて 二の膝ゝゝゝゝゝ頭ゝゝゝゝて

三の物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝや

一口　一みやゝゝゝゝゝ 名香 佛ゝ

ゝ香や

一みやゝゝゝゝて 宴ハ禁中ゝ

人ゝゝゝゝゝゝや

一みゝゝゝゝゝ れれ行待のゝゝゝ

や 思おもゝゝゝゝゝゝれをつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

どうもれびんよりあるく人ハ紫のうるわの要衣を羨て祖父するを此
うちうち人ども云や 哥 うちうちとハさるのうとをいひや 衣
鳥 此れ不審

一みそぐちハひろうて 笹 麓とうろうや

一みちのうるぐく 檀紙や まるうれうや

一れんハうう 哥 毎年 定れうるや

一みしいなくあるハるる みしいなくどハ桐帝 おうとハ源のるや

一れうるハうちれ茶ちぐく 古墳 何世人 不識 姓 兼 名 化 作 路 傍 土

年〻春 鼻 生 不天

月 家 よりうるて ううる

一みうはぐぐ走ぐ 物のるや

一みぐどのれめとうく みめどもむ

べし 日本紀ニハ 肥の字とうくもうぐ

一家うるめしあるよハ 龍文や 一みやこうくうんうとも 仲内 在

伊国云 懐 列 うるひうるのうて 舟 走 よあひ 結 す 哥 て 文 る 巣 と

ゆて ううて うる 幸 府 人 ぐ ぐれ めうる 業 報 物 沈 よ う う る

一みちうひて ろのりうぐひるる

一みそひけあるうけ 此 衣 櫃 あるる 荷や

一家ぐしあめぐり 家 在 ハ 蛭 児 ぐうるて の 結 や めぐうるるれうるや

一みつのる 哥 三 極 ハ 門 る 井 る 厠 る 是 三 極 や

一みうそくるれか うるれかどハ禁中のかど云心れ

一右ハぐんのうるこうるんうれトづくえ 天 盛 哥 合 右 方 例 須 沉 机 浪

香 下 机 浅 縹 浮 文 織 地 裏 云 う 結 今 乗 右 方 絵 ハ 沉 の 苔 よ 入 う

結 足 ハ ゆ うるくうれる 世 うる 何 ま て つ う れ ぐ ハ え

ずきんうゐ沉のあるをとゝ云ゝ下机とつくれり手炙ハ下机ゝ
地炭の古地のうまれ物也ゝ紙ゆひのうゝ民花ゝとうゝ
かくゝも河海ゝハ蔵くの糸ゝてむすびうゝ出ゝうれうゝ
ゝ紙ゆひのくゝハあゝびむすびや
一民ア太物行 民ア太物行 兼明親王 二男
一みゝ切りの数ゝまれ ゝゝ切ゝ参ゝ或人の姫宮ゝ撞木ゝ
ゝゝ対面ゝてゝゝ話ゝ歌俗ゝ
て久ゝ切ゝれバ我も人も幸深て行ゝ昔ゝ物ゝ云心
ゝ芸のうゝもきゝん也 一みゝて酒も切ゝ松風ゝ
月ゝ人ゝゝゝハ海ゝ人ゝゝ也 花ハ月まゝ物べ酒世ゝらひて
ちゝん也 一みゝ中ゝさわげゝ也 香炉

峯雪撥簾看 承天
内親主 延喜皇女 村上帝ノ時 弘徽殿
てまいゝを結ける例多ゝ 一みゝ切ゝ例多ゝ
所同ゝ節ゝめ結ゝ例のゝ一部ゝ節ゝ交ゝ
ゝゝ言わゝ云見ゝゝゝゝゝ
一みゝのゝ六位のゝ文ゝゝゝゝゝ
一みづ当のゝゝゝゝゝゝゝ
一れあゝまいゝゝ
一みづむや 踏哥ゝ人ゝ饗応ゝ
ゝけ飯ゝ用ゝゝゝゝゝ
ゝ宿酒ゝ用ゝゝゝゝゝ

初め表、空にて必ずゆくべし　一みぎわ　ひがしの方より西へまたがる
分をすて勝負するべし、もしまたがるべし
一みぎわ　ひがしの方より西へ　ひがしの方へ　さうのれうそ
ひいらぎ　ヨアヒ記、雪餅親主云、着地帽布衣及袴、或ハ茶木蘭小
袴、餅袋　今案、是ハ王卿の雪餅の殺事也、布ハ茶木蘭の惣
の文也、ハカマ、或ハ茶木蘭地のこめのこめ也、ともかく
空にて、頼子ハ下ゴロネ、こめのすや、袋をけ、べし
冠ハ巻纓の冠とこそ、仁和寺の行幸、行平中納言、大雪餅の
ち衣、鶴を文、ひいらぎ、王卿の雪餅のすや
一みぎわ　のあるいろ　延喜四年、行幸例也、法皇ハ必黒袋の絶ハ、外
一のこつい、主上ハ月ハ、河　延喜四年十月九日大井行幸

上服、赤袋、絶、黒、杉、深れ絶、文、竹、風、時、儀、法皇、黒袋、絶、着、すゑ、時、ハ、
主上、赤袋、れ絶、を、ハ、ゑ、ゑ、ゑ、ゑ、略、之
一みあるいろ　人合也
一みぎわ　のあるすとこ　人云也
ちど云同すや
一みぎわ　あるゆ中　河　三種ハ鳥方
治承極秘寛数伝授記、云、春ハ丁子加皆、べし、ゑ、れば、心、ゑ、ゑ
ゑ、ゑ、ゑ
一みあれ　ゑあれハ、玉依姫の別雷
神とうゑ、ゑ、ゑ、

一みちの殿ばらうちわたる所にはらはらと　延久の人の御日記

一みづーかのうちひのおさ院のう

筆は鶴をもちれうをもちや

ひれ厨子所別当一人領膳（カシハデタキチ）　鵜飼江人（ウカヒ）　細代（アミシロ）

凱歌　六条院　そのほかれ厨子所　鵜飼のおさは四衰

はあるはかや　一ゐれ厨子所　鵜飼（ウカヒ）　生（セ）　膳（ゼン）をつかさどるものやそれ

はかりれ鵜飼（ウカヒ）　細のかたべし

一みどれぐるあるいやくしゐ　朝覲行幸（キンギヤウ）は帛袷（ヒ）をた

きて上皇を拝し給ふ　一みづーれ心ゐるれて（カヒ）三易

唯一心（ゲム）に別法（ヘウボウ）のごとくゐるれば　一ゐれ張（チヤウ）の本法　張（チヤウ）は戸代（ヒ）なり

きるあるべきやうにる

の腸（ワタ）はるるや　一京の住侍　中宮のおまちぎみ

弓場殿（ユバ）院の殿上人と中宮を京をとうけて京仕人（ミヤヅカヒト）べし

一みぬ（ヒ）ぬ　ぬ　ぬ　

一 所 みやまぶきはねぶく　ぶく　ぶく　

二条・三条時ふれ見ぬ所やうよりまいりまいりされとも

一みぐるまやう　季の頃横笛にて四季より仁王経を中ぶくをこか

もろくや　　一みづくれる紙　本素の服

ちりちりに三ヶ月吹べし・紙より私の志ろ法華の狩ごろしろと

一家人い　日蔭のぐるまよりて糸を結て付ちり・老明ハ鬼今の

想君日月の光もられ度ぶふ・ふさるぐをもせのくり

一三ぐるまぐるまよりめ　山河よりて・花を呼花に成ぐるまの三年

せこあのくち・文芸の官位に付・花を呼花に成ぐるまの三年

ハ芸の八宗へ寄りのしてよりて・天王ハ心をつくしのみまでのりを

筆の池ぶりうくやうるまもまめやうるり屋よりもこうるをつくう

まちのみぐるまぐるまよりめとまうまでせ・やうるられば

芸の年数官位もられとれ遠ありさ乱れ人の四よりぐるまぐるまし

一みぐるまあしくて　中ぐるまぐるまさばさいくゆきられ足の労ゆく

べきぐるまや　　一みやうられと　行香札四角ゑ

結密線机ぐるまめ多れ多代ぐるまさしてぐるまや

一みくぐるねの　うくりのてるて中へぐるまをいくり

一みえもくぐふ　行ぐくへ四をうるりるりべし

一みえぐるまあるれ　足ぬのぐるくぐるをうぐるりあり法華ぬれハ流く

ぐるまぐるまや　　一三ぐるまぐるま　三條四條也

一れ車のりぐ　本式の嫁娶の礼まぐるや

一三ぐるまぐるね　女の装束ハ唐装束・細長ハ貴女装束・袴礼

敢ニおる見ぐるまや・三ぐるまぐるねの唐衣ハ中倍ありをいぐるや

腰ハ小腰ノ腰也。或ハ白。或ハ地摺。或ハ袴濃ホ。ゑ。ニ。ゑ。ニ。ゑ。ニ

舎や　舎八敷の事や

一つつひ　何　料理　他仏者

一しんして　信じてや

さ云や

一しんでん　寝殿や

一芋　山芋　地黄　ようず　うの丸　露　すれぬと　薯の葵　うまく

山芋ようてつりされうどこしうわ　芋ようと　薯　秋院　ようや

一しのめ　夜あけ　海　云や

一ろさうすれ　夜の裏　米や

一しうねさ人　人のいふすをさうめをさうねさうや

一しうるどが　さてもうさ海や

一ぢねん　自然

一ぢち　実や

一しぢく　屬　数や　数とうめう

一れ　地　愚人　ぐちあう　心や

一或人の文の姫　ぐう　数ぐかなり

一しのめ　夜あけ　海　云や

一ろさうすれ　夜の裏　米や

一しうねさ人　人のいふすをさうめをさうねさうや

一しうるどが　さてもうさ海や

一しびぐう　地　うるあをうろ　ようくう　引けてうろ　物や

褶　うろ　や

うすあ　裏　や　さうん　を　面　蘇芳　袁　萌　芽や

一ちうろ　人の　衣うう　八月九日　西　地　和　多　声万　声　無止　時　白　秋　八

衣のかうや

一しろさわうをうすあ　うす　久八

紫　や　白さあ　世のうろ　ようるうのうさうろうや

一しのぶ　草　彩　生うう　草や

一下げいし　下　部　月　や　変うも

つふ　まうう　と　八　古　大　民　変や

一しねぢ　さ　ねう　ちれう　心や　幸うと　地　ねれう　ろう　云や

一しふぢ　わ　こ　喉　痛　や　ふ　の　す　さ　の　す　や

一しうう　さ　を　切　て　ろ　う　て　と　て　心　ね　や　ち　そ　こ　ち　ひ

一しのて　れしごろ也
一しぐ　試也　まれなる也
一秋風　盛法師也
一四位下のくい　四位以下加階也
四位下　官をすむる　賀れば
行幸なれ時の例　官をすむる
一れて　源氏のたちもと
の給ぬ　ゆかりの分なるべし　四也
一しとのぐして　今業
たちの話也　話は衣のすそ也　歩　袖をはらひ
一ぬるねの条　人のたちの風のしんぴまなり　これ　撰の日　勅使
五つは　勅使来を　馬　撰　和歌　月　杏　紫をつ
くる也
一しらるも　女車　調度
それなれども　これ　独　志のびの心をてけ

一しれ　たちたちたちむべし
一しまれたれたる　鶯　鶯　孔　冷霜　紫宣　とまりとあるを　白
しどたたたる　紫　す　ものしる
一しれば　日連　日本記　かぶ　面　あひ　ひ　ひ　たたる
一したたる人　年　たたたたたる人　也　又　たたたたたる人　ひ　と　定本
たる　紫振　人　孔　孔　紫　たる　たたたたたる　孔　のめ　ひ　の　也
一しぬたにあたけけさ　古早也　淡貧也
一しずねてあへても　河　光源氏　大将　在　紙　ひしを　多
ひ　源　居　孔　古　本　赴　謫　也　人　配　流　宣　まして
左遷　今　源　ば　恐　孔　孔　孔　孔　孔　孔　孔　孔　孔　孔
五位　東宮　孔　孔　孔　孔　孔　孔　孔　孔　孔　孔　孔　孔　孔

ゝる。花蕚西方に大内の太宰府まで遷されぬ。この恨
波風にあたられ、例なきまでなげき給へり
一やうゝゝそれをあけられをるひめ 何 聖廟宰府にて御しゝ
御れ精をして、多分法華経と令持経給ふと云ゝ
一二の星外故人心 三五夜中新月色 二子星外故人心
一ゝをるとのひゝんのひゝめやうゝ 史記曰 趙高欲為乱恐群
臣不聽乃先設験持鹿獻於二世曰馬也二世笑曰丞相誤邪謂
鹿為馬問左右ゝ或默或言馬以阿順趙高或言鹿者高陰
中諸言鹿者以法 秦始皇本紀
後夢 漢宮万里月前腸 昭君の心を作りなぐさめ
一ゝらゝゝ海 源のゝゝ一ゝ

一ゝつまゝゝゝ

らず故に親王のよし唯して四位に叙しられんと云ふ事なれども
代辞所あるべし也　一四韵　四韵とは八句の詩也
一史記　百丈寒　馬遷作　一或人　一勅八首中の或人
し親もとるべきなるべし　普人々とはいとなり宮也
一或人はつきれ四月九日に河延長四年七月九日に記日去月丈
三日或人有養有試判丈共判及第者二人と略之れ前試
勅撰をのみ延長應和康保ホの例也
一しらべのれる観世音寺　在筑前ノ沙弥満誓造筑前ノ國観
世音寺別当見万葉之巻ハ京の巻也
一しらべらる　しらべハ三つ結びとも也行ちあつびてうべし
うりハ三棲山なれば此うりハ瓜ぐし水まうとうち

一しらき一まるうるぐいもぐ河白細也乳香ノ物の細也とあり
そつぐきるれば細也云何略しうる乳腰延縮也腰ようし
しうむ物也　呼　白ら一言ハ
一ちゆうかう　実法也
とりのおるべ
一しぐうこうかう　ちぐうこうかう
しうやうまくすぐる文なべうるる
一十二月ハ河原人　河原ハ生て解除する也
一しつまつる　河只うべめうきそひて来とそうあるれ
一しうね　河商　一しばうも云れぬ　酔月在次
文なべう結也今ハ月れぬ云れども云れこうべうる

月とちげんや、なと側と伝うてひのえを

一しんてんれくるちのぞを例のごろうひまて 弘 第年七年十二

月十七日、陽成院ハ寅寝殿西 被出才二南立螺鈿俳 今

東紫ノ上ハ寅ハ二条院ゑてをこちるくくく

類無他悟憤勿頑愚似浜爺 永天文十八うて始て男子をもう
けて名を生涯と号す。そのよむうひて作り給ひしなり。涙四十八
うて業を生ずるなり。

一 一つとまつこと ようぶりなる作也

一 ろくろの中のとい 和琴弁二の弦も秘曲なれば落葉より作
へめぐりをとろむとや 一七そうの法服 海時 後時

一 呪孔三孔唄散花 堂達 ひせ作役者也

一 しゅぐるねぐろ出るとくろて 垂衣の下よりそくぐるねるすると
いろあとくろ。西家物云。上臈者垂衣下長下襲遊役ふるまと

一 しでれ山 十一王経 元天山門集鬼神

一 しやくちやう 佛名第三夜錫杖 印法よりもそ。鬼礼祝云とこのり

一 しのみつとも 酒孔雀山

一 しことしいふし 白氏文集十四。

知賤白紙毎三東事是君詩事是皆誣年不展縁身病今自開看
生蠹魚 鮎ゴ似くろ有ゴ魚ともくとも云也

一 しるべをし 栗内者いくりてまくふと。ものくさかるのも也

一 夢不軽とるんつとも 法華経不軽菩薩経云。我深敬汝等不敢軽慢所以者何
汝等皆行菩薩道当得作仏 大菩薩位。不軽菩薩。
て。ひせ四字の偈を唱て。四衆より礼拝しもくち。是ハ一切衆生の仏性あ
るれよりおがみのくるまや

一 しゅくるくりつまし 中是礼こそて
ぬ1出のよい弁が神ゴもとくるとなるも

一 しれてろや これてろハ級照日記 是ハ方第礼哥とまくり引也

一 しあゆひし うこ無へといひし
へくれうとくとくるも

一 といまくるあと。いで姫ゴうろ。是也。ものゆハ礼しくろ四也

一しろがねのこがたな　あやまり　一ふくそん　右政官　政官也、二官
と宛字なるべき歟、官なるべき歟、とかれて来る也
一しらき　彩羅也　一しろき一重　あや、あるやき
ろうかとうとうとうとうとう

源氏目録巻第七

ひ　ひ

一ひるがほ　永一面といふ也、ひるがほといふを用也
一ひかて　神をひかてといふる也
一ひかてそなん　物書けるをひかてするとも也
一ひとくだり　一頃　長恨哥　蓬莱一対なる

一人のみどのこ　楊貴妃をみて後宮家位をさだめ給
る也
一ひかさかけ　源氏と朱雀院なるを、笠をかけるなり
一ひろき　河辺の寺　四皇子　敦慶親王号　玉光宮好色者歌
人也
一ひろいれのたち　引人の大臣とい
馬帽子親のる也　蓑のこの文　太刀也、加冠の人也
一ひかのつるのれむま　蓑人百の馬　月夜れ馬といふる蓑の
馬也、蓑をすてゝ蓑の紐ゆる蓑人百の被蓑也　蓑馬ゆる
一ひろ源氏　ろうつぐの琴の緒の光をうけて書
一ひろめ人づけて　河　由付　一ろをろ〳〵する人もある也
一ひろ〳〵れれおるぐほどのすをなや

一 柏素淺　素淺い天下の政をもしろしめつかさどる八首よ
まつ大納言まで素淺と柏桑淺とは宰相よりあり三
四位あるどのもの
大夫淺や
も今のやうに髪ながくふれ尾さいひて喝食あるどれやうに
ちちむやくまでつくほどやさうろひさいごをさくまとあり
一 ひそうあり　石出河　頻成人のあく時はれとけ出る事
を云やや文章老ぬれば口のすけむをも云や
一 ひぐらきみうを　山の討ち鳥の羽をつひろ拾て裝束を引ぬく
ろひて　ひろうろ仲や
惟や

一 ひとやまあるあ人ませそ
一 びんるるさ　喜後や
一 ひぐるさ　源宮位あるどすこみてそ
一 人とあり　源宮位あるどすこみてそ
一 ひうあるさ　ちそれよ光あるさ〜い拍子あ〜法そ
一 ひあやうしと　今もひうじさちう番の者の声や
一 ひしく　軒や
一 ひぐれて　僻者ル
一 ひやうあるやうの文　紫の文淺ハ成ア〜ちそ云や
一 一ちう　一孫や　ひうちんや紫のこハ殺生　苦ア〜の一孫や
一 人めりあるさ　一文字ハ体字や　人めるさや

一ひすび　夷おすびとうや
とうや　暗とうやうや

一ひとつきとうとうれ　てびもちのう
一人のとうどまでやぼーやれう
人のみどまでの伯いうとうとうと

氷降・大如梅 呼 あられ降ぐれもぐるや

一人のみぐるを美をもんじて傳說ホ古美不二勝斗美の背ア

ゐれば・瑞ゐるを依てらや

一びとれほうしゐるをもて花

琵琶ひきてあわく法師や商時の盲目のごとく

一人のうるを時うつり世中をぐるめ打ハ 漢高祖威を人を

竈をしゐるを趙主如意をたみうるをうんをし 時呂太后

とられうれへて・張良ゐるをとられしゐ張良ゐるをしゐるをて

四皓をめして是をつれて・高祖の為ゐ朝しゐ高祖太ゐぐ

うるを羽翼已ゐるをぐれめて・惠帝をりれもゐをみうるを人

られざりしゐるを云や

一ひらぐうる むをけすぐうる

ひゐあるれ中 中あるうるや

一ひらあるを

うくうるせのゐ紙根て・紙ゐられ書てうるべうる紙をうや

一ひと考ゐる 呼 結句の番肝要をあるうるふや

一ひぐらいゐうるの為ゐすゐうれけるく 天滅哥合 左方例漬ば案

檀机・藤芳下机・案綺地表云ゐ今案左方絵ハ案檀の為ゐ

へて・藤芳のまゐてつれゐるけるくゐるまゐ下づゐるべしゐ表

地ハ案のゐしの綺や・折安ハ机をすへゐる地表や・それハ蒲萄源云

ゐしれ綺や・表ゐハ机のゐ蘇ゐの狩や

一左ゐ紙ゐぶひらゐるをてゐる 哥合ゐ負指ゐてあるや・天滅云

哥合ゐハ負紙若殺を例漬ゐすへて・ゐるれ前ゐるく・表の殺

ゐてゐをゐれゐるや

一ひゐれこゐゐるハ 次生蛭兒雖

巳三歳而脚不立 四夏中記

一日のりゐるハいゐれれゐるしうる

陽成院の御母、二条后、業平中将ちぎりあり。伊勢物語にこれ
を、それとうゝ作る文なり。
一ひうちのそ　引出物
松茸を云。志ある人十日あまりの程に雪のつゝる紙に使
る或は遠慮塗りつゝれば、ものいとゝ物なるべしつゝ雪の山
つゝ世話にあるそなり。げに是れおのの童ゝ汝ゝ中宮を
ゝ奇異の前に作られゝと聞く　ひうを切くるゝ
一ひうまくちゝふ　北堂侍従、礼式にやうそなることを忘
一ひうげの和　河羅蔔　平　饌　古詩拾遺　諸社の祭りにひうげを
髻にする也　苔の類也
一ひとまゝ　厠なるべきやく
一兵衛佐　照宣公ゝ

一ひのれゝ　ひうれれ裝束也
一ひうれ　日本紀　夜水と水酒に漬して用ゆる氷水也　氷室同じ
やうなる水也
一ひうちのすゝ　一面の野辺の雪の波立なり也　無心所着也
一ひうちのてこゝ　出家
一ひうちぶくのゝ　柱皮　柱の多く縁あるを
一ひうんき　縁金帯　金を織りたる
一ひうづ　引出物

人の名也
夜のをゝ人　名也
官人　将監　将曹　府生　也
一人ゝ　ゝ　ゝ　

ふ海や

一屏風四帖ようちれたまをのく。
うちれるとい勅筆の詩や又哥をあそばさるゝと云院ゐ。このあ
やい唐綾ゐてゐゐる屏風や。うすんとはうすぐ。こや

一ひるさかゐゐぐ〜ゐゐゐゐあるゐゐ極や

一人ゐゐ　忠信不事二君。貞女不更二夫

一一日一夜ゐてものむゐ　往生礼讃云。中背中行中根人。一百女戒

處食蓮　吾導

一ひゐゐれ　光君嘆誠院ゐ恩〜

吾〜法二三年後。つゐる暴露〜ゐるゐゐや。天ゐ崩い暴露と
ゐや。ゐ考ゐ幻考〜ゐ九年や蓋の年幻考ゐて又嚴や。六嚴
ゐゐと十四ゐで九年や

一火をけちゐゐ　法花經　佛代

一ひゐ　滅度然薪盡火滅

一ひと　氷奥

てゐをゐゐゐ。ゐ夢の喩ゐの名ゐゐゐ。ゐゐ。何ゐゐれひをゐ〜ゐあゐゐ
心ゐてとい。ひをゐ〜の名ゐゐゐゐてい何れ無ゐゐべこゐや

一ひゐぐゐ　八大地獄八大ぐゐけちゐゐの心ゐあゐ

一ひぐんのゐて　ゐゐい吉日ゐゐ。何も彼岸いゐゐゐや

一ひこゐ〜　彗星。自ゐれゐゐ

一人のゐゐあゐゐん考れゐゐゐ　反魂香のゐや。李夫人うゐて後
漢武帝月泉後裏彼負蓋方士をして。靈素を合をゐて。金炉
ゐ焚〜ぐ。炉の煙の中ゐ李夫人の姿みて〜ゐや

一人いゐれ　神の御出和の名ゐや

一ひと　蛍蟲い朝ゐ生ぐ

一ひじりとうれ　聖人ちどれ世を捨て出家ちまとちまと

一ひこれれ車　庇れ車糸毛や

一ひらげ　擯掃毛車

一ひやうぶれちろよ　昔八袋に入

一人ちまとちと　流生を遇誓

一ひろれくこ　やとアけくぶて

一ひさあけ　もぶちや

ちくし

乳度

せいち

一ひもさ　赤辰の細糸ちづしてれ休息ちれども夕への乳笑ち

一人ちまとちを　波ちれ哥を白家へちて・ちこちをのふちとの結や

一ひつぢのあち　屠面羊歩夏・唐土羊牧亜食呼ちのぞて・

屠面へ和具して行穀歩ちまちぶて・死ぢちづ・光を無常

一人のつむといちす　解義書日

一人ちれとめくれ・人ちもあれ

一人のみぢちを　揚き妃咽屠常

一人ちづくせちた　人犯法石背ち結

一人ちと人敗い水ちぢ物や

一ひを物のちこ　氷を六月暑をさちねよ用ちや　河秀

一ひちへも　すこしちれいちやめぢて・立ちをと人不知ち

一姫家のれぐ　女一家れ祇らひとちち

一人ちをくれ　人ちら遂ちれ・法花経　或被逐人遂ちあち

一人の心ちどいちん　能家迷人れ・若是ち人迷人・遂ちれ

一ひちぐ家　面頬芳ちちち・うぐ芳田尼ちぢれ用ち人

一ひちぢあやうぢて　無本流・力とちぢんどり人の結のか

そきとあづるさらてくゝりとを俗語にいひ傳へうさ無用上
れ仙ゝ弟とりげんとしく人の老尼にまぎらす心おけへを
一ひるまする　陵園妾狩獵終日風蕭瑟　を聖表れ空をよ行あふ

陵園妾より仙ゝを

一ひゝさかし　引手海老
一ひゝ面　人ゝや
とゝゝ面をとゝ面をよゝべし
一ひゝ面ご　松破ゝ　添紙
一ひゝく　後成女院ひしゝ仙ゝの業硫の具足や　添紙
一屏風のおもて　忘あゝゝをかてと云ゝゝゝちと云流あゝ　添紙
一ひゝ　牧や　添紙

一ひゝ　一ひゝいぐゝて　翡翠や　添紙

一ひやくぶれ仙ゝ　百歩が百歩ハ六年ぬや　百歩れそゝゝ義秀
ゝゝ　添紙

ゝ

一ゝゝゝ

一拍のつまり　ふかぐ　深のふくおりまるようて　恥あるや

一拍いと　爰ても行ても　拍子　ふるまふ時　御校をけづり

てれ冠纓に拍忌と云て　付ふ　左袖も白紙を　付るや

篇に　付ふや

一もちまぢさい　もれもぢこや

一もちれされふ　先い　姓いさ人　もれど　せるおろへて

衣位いやしく　著ふふめ人といや

一ふれねぢ　ふ人の根本の　猛姓といや

一文章生　儒者の　ふ時の官や

一もや　ゆ　おもやちぐ　ふきいふ

一ものけ　拍子　拍子　拍子　拍子　拍子　拍子

一拍のふ　ふ　拍子　拍子　拍子　拍子　拍子

さいふ　ふ　云拍子

あれいや

和ちるあるとふ　先い禁中　れるとふ

一もれぐふちぐて　おふる　人のくいくどいふと　拍子ふ云や

一もぐ　喪ふ　袴着や

一もこふふ　実ふ　もふ

ふとふ　内心元　蝿輪　行負　もふ　酔負や　心ふて　ふ細元

一拍ふ　ふ小栄を　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

や　不浄を不遠加や

一もふ　ふ門ふもくせ

ふすぐれ　漢家　ふ　其例多　野相　公在　納云　官家　西家　左府

下接群　賢方　吉辛　赴配　ふ　人　寄　勝計　白氏文集序

一まれびとを　柏原と張よ云ふ　ろろと
一文もとい　陳の才学に比肩　源氏信云ふ
可松也
一まろうとも　勢ハぞう　学中れ　ろ　いる学ちどいへ　只読中
のう海ちち
秦始皇ハ　楚荘襄王のようて　即位　実ハ呂不韋の通ぶて　呂生云ふ
一まろうろ　よい　主の　家のう　ろ　ろ　晉石季倫　金谷春　春花満
林朝作　平里　遮障　逢春不遊　恐是　豪人　承天
一まろぶ　家　大和　柏原云　桃園　桃園　ろ　ろ　ろ　ぶ　ぶ
月　毎日　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ
院と　行云　是　比　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ
文人学文　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ

云心ハ　文人　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ
天子の　ハ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ
生八今日及第　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ
一　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ
の女の親　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ
ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ
夕　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ
一　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ
眉　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ
一　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ
と　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ　ろ

落髪脇や。若いむつまじくぐーと。女二女三れ。き投らえ心や

一月連う仏ゑうらき　花　月連始て六通さえうを。仏ゑうちうさと

いうう。又仏ゑ親近する心ともみうや。そ母の餓鬼及る落うを救

ど　安をーる。盂蘭盆経ゑ読ゑと云く

哥の枕

一もうれ　本津香や　仏ハ体宝也。仏人。

一もれ切うそ　おくて塗や　一もうう人　仏人也

一物へ口うを　恵へ浸結りんすれ。

恵とさうてのかや

物て物へまうちどいゑ行多ーー物まうでのすにも必ゑ有ようぐし

一もいうぐの海　仏そん人おそめ有ることをうるすうて眼の文ゑ

まうまわや。それいうゑ文のと用心ゑうをせうう

せ

一宣命ゑむうん　衛任のうや。れ門の作を文ゑいうてうえのぶ

海ゑうを

ゑとのうゑ。ゑうべし

一せうまうーーゑ　せうそ杉角の心や

一せうと　兄をせうとゑ云や

一せうれうをうてけう　ゑ冬れ日うれ。冬れ衣ぐ人の心や

一恵海波　輪墓ハ恵海波の序や。ゑれも章あうと。南宮謡

云。ゑ曲第和れ時。大納言良峯安世卿の第勅命仕式部卿

依勅改成盤渉調仕詠ゑ心を墓作略ゑ

一せうゑ　ゑんのくゑんゑれやうゑ　戒ゑ人ゑうゑめゑうーー行うを

ゑくうを。人ゑうれうゑう必ゑあうぐーれ心や。戒ゑ人ハ漢高祖の

妻趙王如意の母や。恵帝のゑゑ母ゑうんうを。ゑうんうを

ちからつかれてすでに高松は崩しぬ惠帝位をつぎ
ぬ後呂太后ふれむとひせんらんとして戚夫人の眼をくりぬき人彘
と名づけてこれを中にをきてとれしをしめ
史記曰呂后本紀太后遂斷戚夫人手足去眼燻耳飲瘖藥使
居廁中令曰人彘

一せどやう　せん陳とうてもせ
ちあるとうむや呼軟隙とあるは鼻のやうなる物をそなへ松など
と結ぶうえて壁ぬうてうりや一せどに化粧　身体の紅や或は下管
ちどうとも秘のせうとうと云也　一せうしうくるる　宣旨ぐるや俗る
作ぐるとうと云ふ

一せうとうへぐつてい　次ぎは関を
うて明石へれ出あれば休系は遠やうるうや

一せうとうまるて　遠遠や　あうづりをせうとうと云也

一摂政しめし　天皇ゐれ元服の後も幼主の時は摂政と是
と云復辟の表をうてうつて君に政をえし第後は摂政を
はじめて関白と稱す冷泉院十二にして元服して則ち位につ
うる　太子元服の後定禅の時摂政の例は清和貞觀六年正
元服ある月八月九月惟仁公良房摂政の詔を蒙る此例に准ず
ちや六十三の年齢なり惟仁公の例にあらざるや
一せんしゐむもん　宣旨ゐれ名は今は摂政家なる昔は院なり
もし名ゐべし　ゐれ秘の宣旨なり名集ゐれ中にをとうえうと
一せうとうとうぐれしう　窮者や除目四品籍に内豎乃窮
者ゐうるゐへは大学の充てて年久ゐうも昇進なり
ちめ心や　野宮は早下の位や窮途急　日本記

一せちろくれぶ日うちれぶ〜〜〜

をべきこゝろやもちてこゝに法花経を書奉りて、二条成光さらに
をしへをうけて、末の代の記別をこゝにあひ、我乃右手に時雨晴
ちよ、我今成仏の文法乃法をみて、得を後のよるこゝに、仏のれみと
いこゝにまれるをこゝにつゞけるこゝろをいとこゝろやゝ

一せちく　四月の節ゝ不歳時こゝろ

一せちく川のこゝろ　ちさまれこゝろをこゝろ

一せちまんる　松内晩到月桃園集こゝいとこゝにあれこゝろ行れ

す

一すけもり　何　こゝ人こゝ

一すく　速く清く いこゝぐ心や

一すくして　郡のこゝ

一すくこゝろ　寒曜時　女八寒九曜の行度をもて、人の運命

を勘り右や、てんまんこゝろのこゝろ

一すりこゝさこゝこゝづさ　俗理織こゝ内近寮や作すこゝれを

りや、毒近笛のすゞすこゝ心乃や、河内なこゝまくすこゝろ

一すきこゝぐ　好色こゝ　一すのうんこゝろふこゝろこゝまこゝ

いこゝれも堕落や

一すこゝ　一すこゝ　なぐさこゝや

一すこゝれこゝ　こゝれこゝ心や　賜

一すきこゝ　好色の人や　一ずすやうこゝいのて　ずらうこゝ

こゝ有こゝ、すこゝやうこゝ作こゝのこゝ御　こゝ国御　在国のこゝ

こゝこゝこゝこゝこゝ人のこゝこゝ代こゝのこゝこゝ

一すこゝつさ　すこゝづさ　すこゝこゝあるこゝろ

一すべく　後こゝや　一すくせ　こゝくせや　宿世

一すいぐさ　すいぐさのちりや

一すくよちりめ　すくうちすぐや　もくうちりめ　ハんそうちさ

山のすや　せごるわてうちーハ心の遠近をあらはすや　金器

ミ墨一家まて十ゑ童をうちむうや

一すぐろぐて　うぐろうて回かうちをつろうこ海や　心のうち

れうる成べし　一すのうぐろ和　すれうこんちぐや

ぐろる心ちすれこうくうちをひうを

一すれうちうれうちや　一すうひ活　うや　ーあうひ四や

一ずぐちる　編ずうやずうぐうをうぐうをる

一すくーーく　うちれちうを　すうう回るや

一すーーちうひうく　すーーいわーあうや　車れうびーニを

ちうべうう紙　交ちれでひうくうけを

一栄薩院の行幸　栄薩院といおうねのれ門のおうーます百代

ーや　二茶栄薩ま四町ま造ーれうう　延数のれ守ま　いう多れ門

や栄薩院とーう作ち　宇多れ門といい寛平法皇をーや　十月の

行幸といいまうちの笑のすゑべし　芸秋の行幸うてあり　芸

ててうちんの行幸というちひ　寒の中行のすを紅葉賀といいを

一すゑつむ　知い来ちと　栄さくうまうと　ひ月ーうひや

一すぐれ　ーうすぐれ　ーやすぐれの影や

一ずいぐんーいわて　傾城れ代の人やーうーうちを海や

一すぐろる　うちる回　四すーずの四や

一すゑう　修法　行待やれのはうくーはをーいうちるむや

一すぐの　さるどや
一すいぶい　行ぎうそすしうる酒や
一すれこ　えんさるや　みまうこれまれこともあるべし　あるようべし
一すぐろひうを　すりくどめぐけのうさうさ酒や
一来産院行幸　来産院のう　たこ行ぎ　延喜十六年三月七日行幸来
産院有法皇　女子　笑ぐ云う　見ぐ　みぢのぐる　書ぎうるべし　代巻る
一院ぐ戸すう　則寛平門　うるすうるや　桐壷の内　在位の中に　一院崩御
のすうぐろい　寛平法皇　延喜門崩し　行ぐのちうれ　世行ぎるや
一すさめ　不愛
人うを　離行ぎれぐや
一すちうくにうる行ぎを　潔斎うく
一すぐう　河八十瀬　めしくどぐ
めれいめれうるや　すう河　倍増の名あや

一すうう　此神ちうさうひを　河海に　古語拾遺を　引うすうう
伯告の神　往来の　あを　面もり　行なる　神功皇后　新羅をういげ
行ぎ　岸の　帯ぎうる　明石へ　行ぎれ　あをうひて　行ぎうる　あやし
うれ　行ぎうるうう　ぎうるうるうるうる　伯告の
神ぎ　行ぎ　ゆくぐ　つるる　神蔵　あづうるるや
一すいぐんうう　人とあうふう　ぬべし　伯人も　行ぎ人う
一すうの　寧和　系譜　晩年　変化
一すんあぐわて　巡流や　盃の頃ぐ
うるぐふうるべし
行ぎ
下ぐ
一すうう　阪ぐうたうう　ひうを　行ぎうる
の此月　いとあううる　地ぐうる　小ゆと　筆ぐ　記ぐ　ふうすれ　月

人のいひければ　長と為冬のうごりとふるそ氏信とうて長吹けり

一すきうう寺の鳥ちゑ　簾雲女院崩れ依諒闇被停止也

一すやけうう　三やつうう也　一すけうう　中サ將のうや

一すうう氏光の　伯告相沉よ中納言の姉三人あり中ま一い文殿

そすれうう家づくうきんそて也一立けうを　まま女武殿のまを

ものうう氏光のうるうをやすりうず　ずて　ちて　廻りをくうて

一　ひ・氏光　伯告よ　為信うち　殿よ　伯告姉　光というち　為　今業伯告

の姉光のうを　為まて　ちうれうう　地うて　ひうづ氏　今氏　姉　いうち　紙

うう　為よ伯告うう　生　扶　物　ちうう　賢　心　けうう　うう　うう

られ　伯告　為

一　梅　ず　ず　ず　慢　ず　伯告　て　ちや

一　すへうん　湯　つけ　給や

一夜のうう　うう　を　ちうられ　ちうや　すう　氏　ずう　深　のか　光　ちうう　ふう　ふう　為　田也

一朱雀院の門　ちうう　氏　筆　い　夜　のう　ふう　そ　の　う

一すう氏山と石のようう　為　今業　門典　紙典　う　義　とけう　う

姉　とい　氏　今氏　物　沉　よ　ちう　い　若　恵　紙　人　の　め　將　の　奇　妻　を

ちうう　すう　ちう　う　毎　ふ　ちう　氏　ち　心　ちう　ちう　ちう　ふ　べ　し

光　須　弥　ふ　い　梵　沉　よ　い　顔　迷　ち　色　心　唐　よ　い　妙　ち　山　ち　ふ　四　室　を

ま　て　つ　ち　ち　て　妙　ち　ふ　地　う　入　う　八　方　中　角　地　を　出　う　八　寄　合

て　十　六　方　中　角　の　山　ち　う　氏　て　う　ち　ち　ち　て　う　ち　ち　ち

ぐうとえいやとばかりつきぐれば、ひとりのうへをえぬべし。心のたんうち
月日とともにおこりぬ。月は中宮、日は東宮。たとえば、ひとのれば、
家を立て、妻を求めて、生まれぬべき。されども、心のうちにうれえ、
を充てうちめとえいは、石の上世にのがれて、常寂をしたがうん
ちのれば、のれ他をいかぶりて、心をびのろ
き海をうへとえは、東宮つねは位をうばいて、四海をうばん
にうちうとめぐる。親房いちいちに毎日のうて、西をさして、
べて殺若の毎日捧ぎて、生死の海を渡て、西方極楽に
いるべきにこそ。現当二世に乳母を必捨して、目出度覚
や。善道、仏人の善を、須弥日月をみるるは、善光仏一
もとめをもとめうずるを心おろかなるといへば、各乳母

かの水鉢をうるいおせれ利益をうるをいへどもなどへても
とうべきや。代略す
一位うれれ乳のくくくくいろん
一位吉治東遊神楽所五年九月十九日れ壇開白 千時 陰身宝家 系名清水
一位吉可渡こうを
ひろき霧の雲乳の坊もしろ
神のけ絵白ゆふうや
かの心や
一すくうて、花すくすぐてどいい法ようそれうる心
一すぐ理ようを施めべきようをしそれ見のすれいくくくをる約
一ものいくや
一ものうへの 牧弟みよる。昔恵

一すぐれたる　八宝丸ゑまれたる

一すぐれたる　祝ハ文殊の眼といへり

祝ハ物不言ごとく、菩家の寄うるゑ

一おなじく　神恵三年　依田進ね撰人七月十六日ゆね

撰とる作や　廿六日円ゑ　廿八日廿八日　廿九日授出

小月廿八日や　依田の供れ人と云集てゆんずる　物ハ答後ゑ

とぐうてゆんあるとぬるゑ出と云

一すぐれ　終者下人や　ゑ丸ハ依の人ゆゑ出ゆゑ

一すぐれ　出家や

一すぐれ　多集や